

---

# 偉大なる陰陽師の言霊術師

寒椿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偉大なる陰陽師の言霊術師

### 【Nコード】

N0821X

### 【作者名】

寒椿

### 【あらすじ】

ある何をしてもやる気のない少女が、トラックにひかれ、死んだ瞬間から運命が変わる！！言霊術師として“ある”陰陽少女に成り代わり、その世界で傍観を決め込みたまには原作に介入するやる気のない子の世界改革物語！？

## ブローグ（前書き）

更新時期は不定期になり、寒椿の気分しだいというとても悲慘な結果になると思われます…

## プロローグ

かつて人は 妖怪を 畏れた

その妖怪の先頭に立ち

百鬼を率いる男

人々はその者を妖怪の総大将

あるいはこう呼んだ

魑魅魍魎の主、

ぬらりひょん  
と

ムシーーーー。

気づいたら、目の前に大型トラックがあった。止まる様には見えな  
い。

『（ウチ、もう死ぬんだなあ……

それでも……

即死でよかった（^^）b』

人生の最後にそう思った彼女は、意識を落とし、この世を去った。

『おぎゃーっ、おぎゃーっ』

誰、叫んでるの？

ああ、自分か。

「かわいい、かわいい私の子。やっと会えた。

あなたの名前は…そうね…」

ウチの目の前にいるきれいな女の人は何かを考えるそぶりをした。

ウチの母はこの人か…結構な美人さんやなあ…

「そうね…やっぱり…」

あなたの名前は、『ゆら』、『花開院ゆら』よ!」

拝啓、今までウチがいた世界の者たちよ

どうやらウチは世に言う転生をしたらしい。ぬら孫の世界に。  
しかも、よりもよって、ウチが前世から嫌いだったキャラ、

『花開院ゆら』に!



## プロローグ（後書き）

結構主人公はクールな性格で、あまり前世の世界に未練はなかった  
ります…。いきなりの転生という状況を冷静に丸呑みしたり、あれ  
でも結構内心であせているはず…。！です

## ウチと始まり（前書き）

やっと始めました：転生物：  
寒椿の最初の作品なので、ちょっと色々変な所もあるかと思いますが、  
暖かく見守っていてください

## ウチと始まり

『かあちゃん、まってえー』

「ふふ、こっちにいらっしやい」

ウチが『花開院ゆら』になって2年たった。つまり、ウチも2歳。

あまり舌が回らず、赤ちゃん言葉をしゃべる二歳児だけど精神年齢  
ピー歳だ。  
つまり、

見た目は子供、頭脳は大人。名探偵コン！

のリアル版だ。

……言っていて悲しい。

「ゆら」

この声は…

『あきふしゃ兄ー！』

そう、原作でキモくて怪しい三ツ目にとりつかれ、操られた妖刀職人？だ。

実際に見てみると分かると思うが、彼は結構な美形である。なのでよく癒しのためにのほほんと見せてもらっている…イケメンは人類の宝！！

話を戻すと、ウチは今、母さんと兄様たちと一緒に遊んでいる。

……普通に、だ。決して式神など使っていない。

それと、一緒に遊んでるのは秋房義兄だけではない。

そう、今ここに、未来の（今もだけど）『原作のゆら』の兄様があと二人いる。

まず、兄の竜二だ。

原作では嫌いなキャラのトップランク入り！な人だった。実際に本物を前にしてみると、意外と優しい。本当にビックリした。たまにちょっかいだしてくるけど、たまにいじられるけど、倍返し（ゲフンツェーと、スルーしてたら、優しくなりました。ちょっと

とだけね

次に、魔魅流君だ。

原作とは違って明るい。というか、原作では『ゆら』のために力を手に入れ、あんな風に意識のない体になったといっているが、ウチのためにもあんなことをしてくれるのだろうか…？

まあ色々疑問に思いながらも、ウチは育ってます。

「おい、ゆらあ！今度はどんな遊びをするんだ？」

『えーとお、こんどはおにごっこするうー！』

一応、皆の前では元気な女の子的な？（ウザッ

「じゃあ、オレが鬼だ！秋房と魔魅流とゆらが逃げるんだからな！じゃあ、行くぞ！」

『「わああー！逃げろー！」「」』

「ふふっ」

ウチの母さんはそれを暖かく、見守っていた。



## ウチと始まり（後書き）

いよいよ始まったといっても、全然原作には入っていません!! つていうか、次の話にはもう原作突入だと思えます… 相変わらず展開はやい…

ウチと原作突入（前書き）

いよいよ原作開始です!!



## ウチと原作突入

ウチもとうとう十二歳、つまり中学生、つまり、原作突入！！

話を飛ばしすぎだという皆さん、これはただ単に作者がめんどくさ（ゲフンツ）えー、あれからたいした事が無かったからである。

ただ単に、花開院のクソジジイ共が『妖怪は黒、自分たちが白』とか『自分たちは絶対的な正義』と言ってきたり、おじいちゃん（27代目当主）とTKG仲間になったり、式神 破軍が使えるようにたったりと、色々普通に過ごしてきた。

それはおいといて、やっと着いた『浮世絵町』の『浮世絵中学校』だ。

色々と迷ったが、やっと着いた中学校。でも、これからどう行けば…

おっと、前方に女の子発見！職員室までの道のりを聞こう！

『あの…ごめんなさい』

職員室はどこですか？ 勝手が分からなくて』

「ああ…2階だよ この棟の…」

『おおきに』

ウチはそういって、その子から離れた…

って、あの子！！完全に前世からウチが嫌いな自意識過剰少女『家長力ナ』！ど、どうしよう…まあ、ちがう風を感じるかもしれないし、今は保留にしておこう…

しかし、あまり近づかないほうが良いのかな…？ま、いいや！！

『京都から来ました 花開院といいます』

『フルネームは花開院ゆらです。 どうぞよしなに…』

その後の休み時間、女子がいっぱいやってきて、色々と質問をしてくる。正直言って、うゝ…… 困る。

そのとき、後ろのほうでワカメ（酷い）が騒いでいるのに気がついた。旧校舎がどうこうとか、＜呪いの人形と日記＞がどうこうとか…って、

『その話…本当？それ…ウチも見たいんやけど』

完全にウチが原作で滅する人形やん！おっと、口調が京都風に…

ウチが思いふけているうちに、どうやら話が進んでいたようで…

「清十字怪奇探偵団！！今日はボクの家集合だからな …！」

ウザッ…



## ウチと原作突入（後書き）

色々と問題があるかと思いますが、これからよろしくです。

## ウチとワカメの家（前書き）

今回は清継の家に行きます！！この話で主人公の能力が分かってきますよ！

## ウチとワカメの家

〔清継の家〕

超成金、以上。

金目の物がいっぱいある。キラーン

そして、見つけた…あの人形を…

とてもすごい負のオーラを放っている。

悲しかったんだろうなあ…自分の大好きな主に捨てられて…

ウチがそう思っている間に話が進んだようで、清継が日記を読み始めた。

【2月22日…

引越しまであと7日

昨日 これを機に祖母からもらった日本人形をすてることにした  
といっても機会はうかがってはいたが本当は怖くてなかなか捨てられなかっただけで 雨がふっていたが思いきって捨てた

すると今日 なぜか捨てたはずの人形がげんかんにおいてあり 目から血のような黒っぽい…】

ウチは人形をチラリと見た。  
即行で人形から視線をずらした。

漫画で見ると普通だが、実際見るとホラーである。

リクオが人形にタツクルをかまし、必死に黒い涙を拭いていた。（



笑)

傍観するのはやることより全然楽しいと気づいたこの日頃…

その後彼は清継の説教を受け、及川氷羅、もとい、雪女とこそこそ話していた。

余談だが、氷羅、もとい雪女は可愛いと思う…戦闘はちょっと残念だけど…

清継が日記を読み進める。

【2月24日

彼氏に言って遠くの山に捨ててきてもらった

その日の夜… 彼氏から電話

「助けてくれ…気づいたらうしろの座席にこいつがのってた…」

考えてみれば昔から変だった…この人形…

気づけば髪がのびているようにも見えた…】

リクオと雪女が何かしゃべっている。おおそは何かこれヤバくね、  
みたいな事だろう。

しかし、本当にかみが伸びている…といであげたらきれいなのに…

清継は聞こえてないのか、読み進める。

そろそろウチの出番か…

【2月28日

引越し前日

おかしい…しまっておいた箱が開いている…】

「日記を…読むのをやめてええ　　！！」

『　とまれ　』

「！！？」

「動きを止めなさい…」

リクオを襲おうとした人形の動きを一時的に止め、そしてそれに近づいた。

「あなたはここにいてはいけません。分かってるよね？」

あなたの望む人は光の向こうにいるから…怖がらないで、安心して…

あなたをきつと抱いてくれるから…」

【ありがとう…お姉ちゃん…】

きれいな光が人形を包み込んだかと思うと、人形は花びらになって消えた。

「…お…陰陽師…かい!？」

「け…花開院さん!？ 今…たしかに…あなた妖怪を…被ったよね!？」

ワカメがうるさいので頷いとく…でも、

『確かに陰陽師やけど、言霊術師でもあるんやで』

「じゃあ…まさかさっきのは…」

『ええ、本当にあぶないとこやったわ（人形ちゃんが）』

「本当だったんだ！！い…いたんだ！！陰陽師…ということは…妖怪も…！」

言霊術師でもあるんですけど！このワカメうぜえ…

彼の後ろでは雪女が震えていて、リクオがそれに戸惑っている。

そういえば、雪女って何でこんなに陰陽師が嫌いなんだろう…他の妖怪でもこんな反応はあまり無いのに…

過去に何かあったのかな…原作ではあまり言っていなかったからわからないけど。それが、思い違い？

それはそうと、リクオが陰陽師が何か分かってないみたいだから、

このウチが説明してしんぜよう…

『ウチは…京都で妖怪退治をなりわいとする陰陽師 花開院家の末  
えい…

それであり、神の使いとされる言霊術師や』

「そういえば花開院で…TVで聞いたことあるような…」

『それは…祖父の花開院秀元やな』

「そ、そんな有名人がなぜ…」

てかさつきからウチが話そうとしてるのに、何だこのワカメ…！話  
の邪魔をしないで欲しい…！

『この町…浮世絵町はたびたび怪異におそわれると有名な町』

「そ、そーなの？」

『うわさでは妖怪の主が住む町とすら言われてるんや』

あからさまに雪女とリクオがビクツてなった…

ポーカーフェイスでないと、ばれてまうで…って、また口調が京都風に…

『とは言つても、ウチはそこらの陰陽師みたいにかんたんに妖怪は滅したりなんかせえへん…どっちかって言うと、妖怪のほうが好きなのかもしれへんなあ…』

「え…それってどうゆう…」

ウチが最後に言った言葉はどうやら皆に聞こえてたようで、分からないといった顔をしていた。

ワカメはワカメで、自分の部活？にプロが来たと騒いで、ウチに延々と『憧れの人』のことを話すし…

ていうか、あんたが探してる人物、あんたのすぐ隣にいるじゃねえか…

気づけよ…（呆）

気づいたら、どんどん話が進んでたようで、次に行くのはリクオの家らしい…

あそこは妖怪の宝庫だからなあ…早く行きたいなあ…キラキラ

今日のまとめ：結果的に、ワカメはウザイ。

## ウチとワカメの家（後書き）

やっと主人公の能力が分かってきましたね…これからも頑張ります  
！！



## ウチと素敵な日本家屋

『じゃあ、いつてくるわ…』

ふはい、いつてらっしゃいニコッ

今の誰！？と思った人、ウチのオトモダチのせいりゅー（ゴホッ…  
ちよつと偉い神様や。

細かいことは気にしたらアカン！

と、まあ、オトモダチに見送られて、ウチはリクオの家に向かいま  
した。

相変わらず、ワカメはうざい。何か話しかけられてるけど、全部ス  
ルー

「それにしても うわさにたがわぬボロ屋敷」

そうワカメがぬかすけど、ウチはテメエの成金屋敷より、この純和風屋敷のほうがいいんじゃないやボケエ…！

「ごめんごめん遅れちゃって…」

「本当に遅いぞ奴良君！！さっさと案内したまえ」

本当に失礼な奴やなあ…ワカメ

「妖怪屋敷で妖怪会議だ！！」

「ちょっと清継くん 奴良くんに失礼だよ」

「かまわんよ」

本当にうぜえワカメ…それにしても、この屋敷ホンマに妖気むんむんやなあ…

ちゃんと隠さないと、竜二兄が来たときに皆全滅しちゃうかもよ…？

く客間く

ビュウウウウ

ガタ ガタ ガタ

「・・・なんか、本当に出そう」

「奴良くんこんな家に住んでたんだね」

「いい雰囲気 それじゃ始めよう」

「今日は花開院さんに…プロの陰陽師の妖怪レクチャーを受けたい  
と思います」

めんどくさいけど、皆の安全のためやし…

『そう やね…』

『最初にこの前の人形 あれは典型的な ？付喪神？の例や』

「つくも神？」

「島くん！！君は何も知らないねえ！！」

『 器物百年を 経て化して 精霊を得て より 人の心を誑かす 』

『付喪神は打ち捨てられた器物が変化した妖怪や』

『 妖怪は色々な種にわけることが出来る。』

人の姿をしたもの 鬼や天狗 河童など超人的な存在

超常現象が具現化したもの…さっき言うてた ふらり火など  
妖怪の1/3は火の妖怪といわれてるんや

やつらの目的は…みな人々をおそれさせるとこや

なかでも一番危ないんは獣の妖怪化した存在！  
やつらの多くは知性があっても理性がない

非常に危険や！

欲望のままに 化かし 祟り 切り裂き！！食らう！！

けっして…さわらぬよう気をつけてほしい…」

ここまで言つと皆、圧倒されたのか、緊張しながらウチを見ていた。

『そして それら百鬼をたばねるのが  
妖怪の総大将 「ぬらりひょん」と…いわれています』

リクオがギクツてした。何かいじりがいがありそう…

『うわさでは…この町にいついているという』

「？ぬらりひょん？か…」

「妖怪の主とは言え…小悪党な妖怪だと思っていたよ…」

『 そんなことあらへん。』

日本には古来からさまざまな妖怪がいたとかんがえられてる…

せやけどウチは、そんな妖怪たちみんなが恐ろしい存在ではないと思っんや…弱い、力のない妖怪もいたかも知れない…

ぬらりひよんはな、そんな‘よわい’妖怪たちを守っていたんではないかと…ウチは思う

けっして、悪さばかりをするやつではないんよ…』

「え…？」

『 なんもあらへんよ…りく…奴良くん』

やべえ…今リクオってよびそうだった…

「あ、ああ…うん（カラス天狗と似たこといつてる…？）」

『 だから…ウチも、ぬらりひよんみたいに「弱い」妖や神様たちをまもっていききたい…できれば、ぬらりひよんにあつて昔のこともききたいし…』

そう…ウチは原作の『ゆら』のように、妖怪封じて認められたいなんてこれっぽっちも思っていない！

むしろ、妖怪さんたちとはオトモダチになりたいし…

皆にとってこの話は壮絶すぎたのか、誰も数分間うごかなかった。

そんな中…

「お茶入りました〜」

ナイスボディーな雰囲気ユルユルしたお姉さんが入ってきた…  
で、おもいきし妖怪じゃん！

リクオの顔がブラックホールになってる（笑）

「ごゆっくり」  
パタン

「何！？誰？」

「おねーさん!？」

「奴良あんなすごいお姉さんがいるのか!？」

リクオ皆のこと置いていったけど、そんなことしたらみんな、探検  
' に行っちゃうよ? まあ、ウチもその一人だけだね…

「あ…そーいえばお手伝いさんがいるって言ってたっけ」

『お手伝いさん…? (世話係兼側近兼下僕だろう)』

『(ちょっとイジワルしようかな?) そう…今のが…

この家は ……どうも…変やな』

にしても、この家…妖気メツチャ充満してるやん!! 本当に妖怪さ  
んたちは隠れる気があるのかいな…

一番感じないのは…さっすがあ 魑魅魍魎の主、ぬらりひょん

リクオには悪いけど…ちょっとここ探検してみたいし、じゃあ行き  
ますか!!



「その頃、リクオは…」

「やあみんな おまたせ」

ガラーン

「アレ？」

「どこに行くんだい花開院くん!!」

おーおー、すごい勢いで妖気が逃げてる…

あっ…リクオが追いついてきた…

『奴良くん、ええなあ…こんな家にすめて…』

「なにいつてるんだい花開院くん！！こんなボロ屋敷のどこが良  
んだい！？」

『最高やないか…にぎやかだし、なあ…奴良くん？』ニッコ

「（すでにほとんどバレてる　！？）」

「みんな〜もどつて妖怪の話しよ〜よ〜」

あー！それよりゲームしようよ！！古今東西妖怪でやる〜？なんて  
」

「だめだ『そうやな。きになるところやけど…勝手はもうしわけあ  
らへんしな

ウチの勘違いや。ごめんなあ…奴良くん…』

楽しかったけど、そろそろ戻らな、リクオがかわいそうやしな…

「あ、ううん…」

「ちえ」

ワカメうざっ

そのあと無事に皆、元の客間に戻った…

「……………」

「特に…何もなかったね…」

リクオがホッとしたのもつかの間、

ガラ　ガラ　ガラ

「おうリクオ　友達かい」

キタ　　！！（　　）／／　魑魅魍魎の主、ぬらりひょん！！

「……………ッ！！」

リクオこける？（笑）

「あっ」

カナおじぎ

「どうもおじゃましてます」

ワカメもおじぎ

リクオのお目目がブラックホール（笑）  
てか、マジでかわいそう…

「おーおー めずらしいのうお前が友達をつれてくるなんてな  
アメいるかい？」

あれは！！有名な宇佐美ばあさんのアメ！！記念にもらってこ…

「どうぞみなさん これからも孫のこと よろしゅうたのんます」  
ペカー

『あ…ハイ…（そうだ…！！）』ピコーン

いいこと考えた…！！

『おじいちゃん…何か？ぬらりひょん？みたいやなあ』

「なっ なっ！！け、花開院さん！そ、そんなことあ、あるわけ、ないじゃん！！あ、あはは…」

リクオよ…ポーカーフェイスを保っていなければ、本当にバレてしまうぞ…

『ぬらり…くらり……としているところが、なあ…？』

「おもしろいこというんじやのうー！！じょうちゃん、名は？」

『“花開院” ゆらです』

ちよつと“花開院”を強調して言うてみた…

「そうか、そうか…」

『花開院“秀元”とは知り合いだと、きいております。』

「最高の悪友じゃ… はっはっはっ」

『しっかし、ホンマ、ぬらりひょんみたいやなあ… “ぬらちゃん” ってよんでもええ？』

「いいぞ… そんな風によばれたのは“秀元”以来じゃ はっはっは」

『そうなん？ ふふふふ』

チラリとリクオを見ると、灰になる寸前だった。そろそろやめんと可哀そうだしなあ…

でも、楽しかったわあ…

そんなことがありながらも、奴良家探索は終わったのだった。（ア  
レ日記？）



## ウチと素敵な日本家屋（後書き）

カラス天狗のセリフに何かかぶってますね…まあ、結果的に言っていると主人公は純和風と妖怪をこよなく愛する変人少女なのです！！これから、主人公ともどもよろしくお願いします！！



## ウチと旧鼠のネズ公（前書き）

ちよつと、少しだけど残酷なパートがあるかもです…捉え方は人それぞれなので

## ウチと旧鼠のネズ公

くその日の夜く

今ウチは、旧鼠がいる一番街にいる。

原作で、『ゆら』とカナが旧鼠につかまるときにいた場所だ。

ちなみにウチの今の格好は、制服ではなく、夜のリクオが着ている着流しみたいなものだ。

そのまま制服なんか着て、原作みたいに破られたりでもしたらヤバイからな。

てか、さっきから周りにいるチャラ男どもがうるさい。

いちいちこんな中坊に声かけてる暇があったら、もっとそこら辺に

いるケバイレディーたちを相手にしろっての。

そんなウチの心の内を知らないチャラ男どもは全然声を掛けてくるのをとめない。」

そのとき…

「ゆらちゃん！」

『あ…えと…家長さん…？』

「この時間は危ないよ この辺」

『え？』

「いこつ 何処住んでんの？あ、一人ぐらしなんだよねー」

『えーっと…そう、やけど…』

カナが来た。ウチの嫌いなキャラトップ（以下省略）

助けてくれたのはいいんやけど、これからちょっと邪魔になりそうやなあ…とか思いながら、彼女と一緒に一番街を歩く…

後ろに妖気を感じふりむくと…

「わっ、女の子が落ちこんでるよ〜」  
ひーろった！俺の店まで持って帰っちゃおーと

しゃべり方までうざい旧鼠がいました　ワオ

どうしようかなあ…

「いこっ…ゆらちゃん」

『下がって…家長さん』

「ゆら…ちゃん…？」

「つれなくすんなよ仔猫ちゃんVV」

アンタら…三代目の知り合いだろ

夜は長いぜ 骨になるまで…しゃぶらせてくれよオオVV」

そう言い、旧鼠は自分の顔をネズミのソレに変えた。

リアルで見るとマジキモッ…

「か…顔が…化物ッ……………」

「長い夜の始まりだ」

旧鼠がそういった瞬間、物陰からほかの奴らもでてきた…

一人でなら、オーケーなんやけど、今カナがおるからなあ…

ちょっとやりずらいかも…

「なに…？これ…？ゆらちゃん…」

『昼間…説明したとおりや 獣の妖怪化』

「え…？」

「おとなしくしてりゃあ…痛い目見なくてすむぜえー」

『…クスツ、ねずみふぜいが…粹がるんちゃうわ

ウチから離れんどいてね家長さん…』

「う、うん」

カナのことをそばに引き寄せ、そして 式神・貪狼 を呼ぶ

『（嫌いだけど、助けないと）貪狼…家長さんをぬらちゃんところに

つれてって』

「ま、まって ゆらちゃんが…ゆらちゃん      ！！」

貪狼がカナをのせて去っていくのは見送ると、構え、そして呟いた。

『      青龍、朱雀よ…我が名の下に召喚されよ      』

すると、ウチを中心に五芒星が地面に浮き上がり、中から真つ赤と金の羽を持つ朱雀と、青くキラキラと銀に輝くウロコを持った青龍がでてきた。

二人は瞬時に人型になり、ウチの隣にたった。

「呼んだか／呼びましたでしょうか？      主」

『貪狼だけじゃ不安やから、朱雀、ついていてくれへん？』

「御意」

朱雀がいなくなったのを確認すると、青龍に言った。

『ただのネズミや…青龍 殺してしまえ』

「我が主の頼みならば」

青龍はそういうと、どこからともなく水を出現させ、それを尖らせネズミをどんどん突き刺し、殺していく。

「なんだこいつぁー!?!」

「こ…こいつ…式神をつかってやがる…術者だ! 陰陽師だ!!! それも…生半可ねえぞお!!!」

「くくく…こいつぁ三代目はそうとうな好き者だな…そんなぶっそうなモノはしまいなよ」

旧鼠はそういうと、ウチのことをさわるうとした。



『さわんじゃねえ…ネズ公やあ…』

「…あ？」

原作でもキレてたし、どうせキレさすなら、もっと面白いほうがいいだろう…？

と、まあ、あの後ネズ公がキレて、ウチはつかまった。

なぜ省略するかというと、普通に考えて、神様いながら負けるとかありえないよ？だから、一応ストーリーを進めるためにウチはつかまった。

勘違いしないでね…ウチや青龍はそんなに弱くない。

ただちょっと、おなすいたなあくみたいで油断して、その時殴られてつかまったわけじゃない。

その時、青龍のほうの召喚を間違えていたなんて、そんなこと断じて起つてない！！

全てをまとめると、ウチは一人、つかまった。

くその頃、奴良家く

ボクが縁側のほうで立っていると、誰かが庭のほうに空から降りてきた。

「総大将はいるか！？」

「えっと、奥にいますとおもっけど…って、カナちゃん！？」

髪が短く、赤い男はそれを聞くと奥のほうへ行った。

「リクオくん、どうしよう…ゆらちゃんが私をかばって…！！  
まだ、あの化物たちのところに…！」

彼女は全てを言う前に、戻ってきた赤髪の男に気絶させられた。

「カナちゃん…！！」

「こいつ、ちょっと疲れてるかもしれないから、休ませるぜ…」

「え、あ…うん」

男はそういうと、カナちゃんを連れて、奥のほうに行った。

すると何処からか声が聞こえた

「若…リクオ様」

「ん…？」

そこに居たのは鼠。

たぶん、妖怪の一種なのだろう、と思った。

「お初お目にかかります

私 旧鼠組の下っ端の使いでございます・・・」

「旧鼠組……？」

## ウチと旧鼠のネズ公（後書き）

主人公、すっかりミスで捕まってしまうました…危険な所でドジッ  
コなのはこれからも続くのでしょうか？

## ウチと若の初対面（前書き）

ようやくと、主人公がリクオさんと夜の対面を果たします！！

## ウチと若の初対面

『…ん…っん…』

『は…！？…』

「よう陰陽少女 どうだ…？ネオンの光の中…処刑される気分は…？」

『な……処刑…？…』

てか、ウチ、言霊術師でもあるんやけど…

「そっだ…あの…三代目のガキが…約束を破ったからな…」

こいつらさっきからニヤニヤしてキモいなあ…

『三代目…？（リクオのことか）ネズ公…それがどうした？』

「おい女…その名で呼ぶなや この町ではな…星矢さんって呼べや  
…！」

ネズ公の周りにいたモブ一号をウチの着流しをつかみ…

ビリッ…！

と、行く前にウチはそいつの腕をわしづかみにし、柔道の一本背負  
いよろしく放り投げた

檻の中からどうやって？という質問はこの際なしに…！

「っ…！獲物風情が…！」

『ネズ公風情がウチにそんな口にききかたとはなあ…』

闇よ…この者どもを沈めよ…！！  
』



青筋を立てながら、床に手を置いて静かにささやく

すると…ウチを中心に黒いもやが広がった。

そのもやから離れようとするネズ公の部下どもの足をもやの中からあらわれた漆黒の骨ばんだ手がつかむ。

それでもやがウチに戻ってくる頃には、少し離れた所にいたネズ公とそいつの部下以外、誰も残ってはいなかった

それでも、ネズ公の部下は増えるばかり…

さすがのウチも、こんな大技を何十分も使ってたら、つかれるぞ…！！

やっぱり、ウチは陰陽師やから、リクオは助けに来てくれへんかもなあ…。

『おいネズ公…ウチはまだ力の1／10も使ってないぜえ？』

それに…むかつくけどもう一人の、あの女やないと三代目はこない。

こんな絶対的な力をまえにしても、てめえはウチを殺すか？ あゝ

あゝあ？』

ドスの効いた声でネズ公たちに言う。

「フンッ　いくらでもネズミを増やしてじわじわと食い殺してやる

知ってるか…？人間の血はなあ…夜明け前の血が一番ドロツとして  
てうめえのよ

ちようど…今くらいのなあ…？」

ウチの言ったことに対してはスルーかこのやろう！！

『　チッ　　闇の力よ！我を守れ、敵を討ち滅ぼせ！！　　』

ウチがそう呟くと、ウチの周りからは闇の陰が現れて鋭い槍のようなものになるとネズ公たちに向かって飛ぶ。

多くのネズ公の部下は消えた。

しかし、肝心のネズ公だけは見方を盾にしていたため無傷だった…

てか、最悪の大将だな。見方を盾にとか…

これってまさかの？玉章？のパクリかッ…！！そうなのか…！！

おなかすいてるし、眠いし、色々バッドコンディションが重なっているためか、ちよつとヤバくなってきた…

てか、ちよつと違う方向にハイテンションになってるんですけど！？

どうしよう…四神の誰か呼ぶかなあ…

ウチがそう思いはじめたとき、どこからか、靄が出てきた…

発信源をみると…奴良組の百鬼夜行がいた…

ウチはそれに驚き目を見開く。

「な…こ…これは…」

『……（キタ）（／＼）…なんで？』

「星矢さん！！こ　これは！？」

「星矢様　　！！」

「化猫組の奴らがいますぜ！！」

『（化猫組…！？てことは、良太猫がいるのか！？）』

急いでキョロキョロとあたりを見回す…

「化猫組よ…あいつらか？」

「ああ…憎い…ねずみだもだ」

『うそ…（イタ　VV良太猫発見！！VVかわええなあ…（うつとり…）…それと、あれがリクオか…やっぱ…かつこいいなあ）』

ちなみに、ウチがこんな風に思っているその間、ウチはポーカーフ  
エイス（無表情）である。将来、アカデミー主演女優賞もそうなめ  
！？

「何者だあ！？テメー」

「本家の奴らだな……………」

「三代目はどーした！？」

いや…あんなガキはどーでもいい…」

「回状は！？回状を見せろ！！　ちゃんと廻したんだろーなあ！！」

ネズ公たちは騒ぐ…マジうぜえ…

「……………ヤツが書いたのなら破いちゃったよ」

「んだと　　！？」

ネズ公どもがさらに騒ぐ…：そういえば、さっきの借りを返さなきゃなあ…？

「ならば約束通り 殺すまでよ」

『それは…だれのことやネズ公…？』

「もちろん、テメエのことd（バキイッ ゲボアッ」

ネズ公が言い終わる前に、そいつの顔面を殴り飛ばした。

うん…いい具合にぶっ飛んだなあ…いい汗かいたわあ…（キラキラ

でもこの後のためには、ちょっと飛ばし過ぎたかなあ…？

『おい、ネズ公…冥土の土産にもってけや…』

ウチらの家はなあ…：やられたら、倍返しが基本、さっさとこっちこいや…まだ、倍返しなの？ば？にもなってへんわ…』

今、その場にいる妖怪さんの顔が引きつったのが分かった…：  
せやけど、今のウチにそんなこと知ったこっちゃない。

すると…

「くくくつ…夜の帝王なる者が　？ねこ？に殴られてちゃ世話ねえな…？」

まあ…それはそうやなあ…ええこと言っなあ　リクオくん…

夜の君とは馬が合いそうやなあ

『ププツ　だっさあ…』ニヤツ

ホンマにださいわあ…てか夜の帝王って、どこの中二病患者…？

「なっ！！なめやがって…てめえら　みな殺しだあ　　！！！」

ソレを合図に妖怪同士の戦いが始まった…

ウチはどうするかって…？

くくくっ……………そう、ウチは……………逃げるだけや　！

抗争が始まり、どう、安全に逃げ出すか考えてたとき…

「つかまって」

『へ？』

ガコオオオン

原作よりはちょっと遅いけど、ウチが入っていたケージを青田坊が壊し、

そして首無がウチのことを助けてくれた。（羽織りもくれたわあ）

やっぱり、生の首無はイケメンやなあ…

浮いてるけど、首。



ウチが首無のイケメンぶりに感動？している間に、

ネズ公の下僕どもはだいぶrikオの百鬼夜行にやられてたみたいで…

「なんで…てめーら…誰の命令で動いている…  
百鬼夜行は主しか動かせねーんじゃ…」

「何言つてんだ 目の前にいるじゃねーか」

「何…ま…まさか」

「この人こそが…！ぬらりひよんの孫…！」

「妖怪の総大将になるお方だ…！」

もう、rikオの自己紹介？をしていた。  
にしても、rikオくん、モテモテやなあ…

「そ そいつが…あのガキの…覚醒…姿…？」

く…やっぱり…あんとき殺しときゃあよかったじゃねーかあ…！」

ネズ公（小）がネズ公（特大大盛大サービス）になりましたーVV  
ワオ

今のウチの感情を素直に言つと…こいつマジでキモい  
終了。

「おいつめられて牙を出したか

だがたいした牙じゃあないようだ」

リクオがそう言った瞬間、ネズ公の周りを蒼い炎が包む…

いやあ…綺麗だなあ…

「てめえらが向けた牙の先

本当に…闇の王んなりてえなら歯牙にかけちゃならねえ奴らだよ

おめえらは…オレの？下？にいる資格もねえ」

「奥義明鏡止水　？桜？」

「な…なんじゃこりゃ　！！」

ネズ公が叫ぶ。

そのまま翻られながら、死んでいけ…

「その波紋鳴りやむまで 全てを・・・燃やし続けるぞ」

「夜明けと共に 塵となれ」

やっぱし、かつこええなあ夜のリクオくん…

（原作での橋の所）

『ちよつとまって…あんた…奴良組三代目やる…？』  
あえて、リクオくんとは言わない…

「「「「「！？」」「」「」

皆の驚く顔は面白いなあ…

『これからは陰陽師兼言霊術師と妖怪さん、仲良くしてかない？』

あつ、それから、ぬらちゃんによろしく言つていてや』

「せいぜい気をつけて帰れ」 フツ

リクオはニヒルな笑みを浮かべながらそう言つと、ウチに背を向けた

『そついえば羽織り、おおきに』

「首無…お前 女に甘いな」

そう言っているリクオの声を聞きながら、

『そついう君も、十分甘いと思うな』

そう思っているウチであつた

## ウチと若の初対面（後書き）

その際、主人公のしゃべりかたが変だとか、統一されてないとか、無視をお願いします！！それも彼女の個性なんです！！

## ウチとリクママと名前呼び

「うらやまし~~~~~」

ワカメがうざい…

「うらやましくないよ………すっごく怖かったんだから!!  
ゆらちゃん…あのあと大丈夫だった…?」

「だけど………  
ちきしょう　なんで君らだけ!!ボクも一番街に行けばよかった!  
」

だったら、一人で一番街に行ってネズ公どもに食われてりゃよかったのに…

このワカメは絶対に一回は痛い目あわないと、ウチの気がすまん…!!

『家長さん…怖い思いさせてごめんなあ…  
ウチがもっと早めに気づいていれば…』

口ではそういつてるけど、ウチが実際にそう思ってるわけないやん  
…！！  
なぜなら…『家長カナ』はウチの嫌いな（以下省略）

でも、カナはリクオと『フラグ』がたつてもうてるし、この先のス  
トーリーにも大切なんだよね…

「しかし君がピンチだからこそ彼は現れた！！  
それでこそボクのあこがれる夜の帝王！！妖怪の主なんだ~~~~~  
~~~~~！！」

ワカメはウチにそう言うてきた…てか、ウチがいつピンチになった  
と言った…？

夜のリクオくんが来てなかったとしても、ウチは多分どうにかでき  
た…

そういえば…昨日が旧鼠編なら、今日リクオ風邪で休むんじゃないか  
った？

皆が行く前に先にいっとこ…一緒にいくと、ワカメがうぜえしな…

『あの…今日ウチこれから用事があるねん…先に帰ってもええ…？』

「ああ いいとも花開院くん！！ではまた明日！！ってやっぱりま  
つてくれ！！まだゴールデンウィークの発表をしていない！！待っ  
てくれ 花開院くん！！」

後ろでワカメが何か叫んでるけど、ウチには関係ない。

誰にも風邪で欠席っていうのに気づいてもらえないなんて…

リクオくん、同情するわあ…

く 奴良家の門の前く

『すいませーん…奴良くんの友達の花開院というものなんですが…  
だれかいませんか…？』



「はい…まあ、リクオのお友達？どうぞ、あがつていって」「ニコッ

ウチが声を掛けると、中から若い女の人がでてきた…

まさか…この人は…若菜さん！？

『あつ…どうも…』

本当にのほほんとした雰囲気を持ち主やなあ…

若菜さんとの出会いに感動しながらも、リクオの部屋まで案内してもらった…

その間に『若菜さん』、『ゆらちゃん』と呼ばれ、呼ぶような関係になった。

（つまり、世に言うオトモダチゲットだ！

「ここよゆらちゃん リクオちょっと寝てるかもしれないから、」

『あ…大丈夫です 寝てたら帰りますんで…』

「そう…？じゃあリクオをよろしくね」

若菜さんはそういうと、ウチをリクオの部屋の前に残して去った行  
った…

いざここに一人で立ってみると、何か緊張するなあ…

ウチは気合を込めると障子にてをかけ、それを少しあげた。

『奴良くん…寝てるんか…？』

「けっ花開院さん！？なんでここにいろの…！？」

リクオは布団の上にいる。

頭の氷がまだ小さいうちゅうことは、まだ雪女は来てへんのかなあ…

『奴良くん今日風邪でかいへんかったやろ…？』

お見舞いにきたんやけど…邪魔やった？それならすぐに帰るけど…』

確かにここは妖怪一家‘奴良組’の本拠地、陰陽師のウチは厄介ごと  
としか持ってこないみたいだけど

それでも邪魔とか言われたら、ウチ、ショックつけるわあ…

今のウチのオーラは真っ黒いと思う。

怒ってるの黒じゃない、悲しくてショックを受けている黒だ…

実際にちよつと沈んでいます…

「えっ…そういう意味じゃなくて…あ、ありがとっ…お見舞いきてくれて…」

それに気づいたリクオくんが焦っている…のか？

『ええよ それに…今からほかの人たちも来るとおもっよ…？』

「ええ！？うそ…」

『何かダメだったん…？』

「そ そういうわけじゃなくて…

そっいえば花開院さん…あのあと無事帰れたんだね よかった…」

『ああ…うん…ありがと』

ほのぼした空気が流れる…

しかし、その間にウチの中では一つの疑問がわきあがっていた

‘あのあと’を聞いてくるってことは、夜のこと覚えてるんじゃないの…？

原作では牛鬼編までそうじゃなかった見たいけど…

ウチが真剣に考えていると、ウチの周りからまた黒いオーラが出てきていたらしく、リクオはなんだか心配しているようだった…

「けっ花開院さん！大丈夫？」

『あ…ああ大丈夫…それと花開院は長いから“ゆら”でええよ』

「うん…じゃあゆらちゃんも名前で呼んでよ」ニコッ

『わかったわ…リクオくん』ニコッ

一応、リクオから名前呼びの許可をもらった！

この調子で全キャラ制覇するぞ　！！オオオオオ　！！

そのまま、ほのぼのとリクオと喋っていると、廊下のほうから誰かの足音が聞こえてきた

ちよつと遠いけど、多分ここに向かっていているとおもっ…

もしかしたらリクオの側近の妖怪一人かもしれないので、ウチは押入れに隠れることにした…

『リクオくん…ウチちよつと眠いからここで休んでもええ…？』  
失礼を承知で聞く…

「あ…ああ　いいよ；　布団敷く？」

以外に普通の反応やなリクオくん…あんま面白くないわあ…

『大丈夫　ここで寝るし』

そういつてウチが指差したのは押入れ。

リクオくんもウチがここに入るとは思ってたらずく、とても驚いていた。

「えええええ！？そこ！？ダメだよ！！ほこりとかいっぱいあるよ！？」

『大丈夫　大丈夫　ウチはそんなやわやないし　ほこりとかも平気！！』

「そついう問題じゃ…」

『大丈夫！！それと誰かきてるみたい…？　じゃおやすみなリクオくん』ニコッ

ウチはそついうと、押入れの中に入っていった。

「ええええええええ！？本当に入っちゃた！！」

リクオくんが騒いでるけどこの際無視。眠いし。

ウチが押入れに入って数分、誰か部屋にきた。

やっぱし毛倡妓とかの側近の妖怪さんたちやった。

リクオくん多分ホッとしてるのかなあ…ウチがいないから

よし、じゃあ…ウチも寝るか

そうウチは思いながら、夢の世界へと旅立って行った…

「ウチが寝始めて数十分後…」

「（何か外がうるさいなあ…）」

眠っていたのに起こされたウチの機嫌は最悪

人の部屋で何騒いでるんか…

ウチが外のうるささにイラつき始めたとき…ウチの斜め上を何かが通りすぎた…

カサカサッ

『へっ？』

ウチがそこをみると、そこにいたのは黒光りする“あいつ”で…

どんどんウチに近寄ってくる…

『ひっ！-！』

ここは狭い押入れなので、どんなに後ろによっても“あいつ”との距離は遠くならず、縮まる一方で…



カサカサッ

どんどん近づいてくる…ウチは今、こいつを叩ける物がない…

あと、接触まで数センチとなったときに、ウチの中で何かが爆発した。

くその頃リクオたちは

ゆらちゃんが押入れに入ってから色々な人たちがこの部屋をいききしていたけど、ゆらちゃんを押入れから出てくる気配はない…

本当に寝ちゃったのかなあ…？

今ボクの周りにはさっきお見舞いに、と来た清継くんたちとお茶を

持ってきたはずだった雪女、もとい氷羅だ。

清継くんは今度のゴールデンウィークの予定を発表しにきたようで…

しかしそれはボクに嫌な予感しか起こさない…

〃〃リクオside end〃〃

「ボクが以前からコンタクトを取っていた妖怪博士に会いに行く！」  
「！」

皆から大ブーイングを受けるが、清継はそんなの関係ないようで…

てか、嫌な予感的中！！

「場所はボクの別荘がある掬目山！！  
今も妖怪伝説が数多く残る彼の地で…妖怪修ぎよ」ぎゃあああああ  
「！！」

ウチは押入れの襖は蹴破りてきた。

最後にワカメが言ったセリフとウチがあげた雄叫び？が重なった…

『いやああああ！！リクオくん！！助け…！！お　押入れに…あ…  
“あいつ”が…！』

ウチはそう言いリクオくんに飛びついた。抱きついたではなく、飛びついた（　ここ重要

ちなみに周りの皆は驚いていた。

「ええええええ！？ゆらちゃん大丈夫！？てか　“あいつ”って！？  
（もしかて妖怪！？）」

『あ…あの…く…黒光りするGが…！！』

「Gって　もしかしてゴキブリ」言っなああああ！！』

キャラが崩壊する寸前だが、皆さんもアレに接触されたらこうなる  
と思いますよ

「だ 大丈夫だよ……もういないよ……」

リクオくんはわざわざ押入れを見に行ってくれた。

風邪で動けないのに……ごめんね（涙）

『そ そうか……いやあ……すまんねリクオくん……』

ウチが取り乱してしまって……

「（変わるの早……！てか妖怪じゃなくてよかった……）」

皆はこれが起こっている間、びっくりしすぎて動けなかったようで……  
見ていて面白い感じになった。皆、顔がポカーンとしている。

リクオはちょっと安心してる。

おおそ妖怪じゃなくてよかったとそんなのだろう……

『で 何話してたん？』

「ああ ゴールデンウィークの予定のこと……てか もしかして本当

に寝てたの！？…」

『いやあゝホンマに眠たくてな……』

ウチも本当に寝ると思わなかったよ…

「そうなんだ……」

ウチとリクオくんは周りを気にせずそのまま話す。

てか、今ちようどワカメが発表してた所、ウチの叫び声がダブってなかった？

ハッ、ざまあ…（ニヤリ）

その後、皆無事に放心状態から抜け出せたようやけど、ウチは質問攻めにあつた。

先に帰ったんじゃないの？とか、何で押入れというか奴良ん家に！？とか…

まあ、全部苦笑いでかわしたけどな！！　ハッハッハッ！！

家長カナからは何か疑う？不思議に思う？ような視線をもらった。  
別に欲しくないけどな！！

リクオくんからゴールデンウィークの予定の大体のことは聞いたから、ウチはあのとそのまま帰った。

やっと牛鬼編かあ…

ウチはあそこに着いたらどう行動したらいいんだろ…

リクオくんの後ついていてもいいけど、そしたらあの子たちが危ないよなあ…

ウチはあまり面倒ごとは嫌いやしなあ…でも夜のリクオくん見たいし…

てか、原作では今回の話で夜のリクオと昼のリクオくんが混ざる？  
合体？するんじゃないかった…？

ウチが何か知ってることもバレる…？

今回、色々と面倒ごとが多いなあ…ハア…

ウチはそう思いながらも次の日のためにもいつもより早く寢床についた…

## ウチとリクママと名前呼び（後書き）

主人公はどこまでもマイペースに、天上天下唯我独尊！！がモットーです！！…多分



## ウチと牛鬼編突入（前書き）

更新遅れてすみません…楽しんでください!!

## ウチと牛鬼編突入

「さあ…みんな いいかな…？それで…」

全員が静かに頷いたのを見、清継の合図と共にカードをテーブルに出した。

「ぐああああ また負けたああ」

「くそ またリクオと花開院さんの勝ちだよ」

「ちくしょー 持つてけよ…賭けたお菓子持つていきやいいだろー  
！！」

ウチらは今、抜目山へと向かう新幹線の中、インディアンポーカーならぬ、妖怪ポーカーをしていて、さつきからウチとリクオくんが20連勝している。

リクオくんがぬらりひよんのカードを、ウチが天狗のカードを取っている。（もちろん全20回とも）

<sup>ワカメ</sup>主催者は始まってから一番弱い納豆小僧しかとらへん。

ウチらもすごいが、ワカメも十分すごい。

「奴良・・・お前「妖怪運」あるなー・・・普通じゃねえぜ 20連勝」

「ええっ！？何言ってるんだよ！！たまたまだよ たまたま！！ボクはフツーフツー！！」

悪いが、普通の人はおじいちゃんに妖怪の総大将なんて持ってない。皆持っていたら、ある意味怖いというかカオスだ。

「あ ボク何か買ってくるよ 何がいいか言ってー」

「え？でも戦績一番悪い人がって・・・」

「いーのいーの！！ボクこーいうの好きだから！！」

「奴良くくやっぱ良い奴くくく　じゃあ冷凍ミカンプリーズ」

リクオくんは優しいっていうか…なんというか…

若干パシリ化してないか…？

てか、さっきからリクオくんに熱い視線を送ってる雪女にカナが疑問？の視線を送ってるんだけど…ある意味雪女より熱いぜ…！！

何か面白いなあ…

リクオくんもリクオくんて罪な男やなあ…

あんなに可愛い（雪女です。Not家長カナ）子達に好かれて…

ほとんど夜の方やけど…；

新幹線とバスを利用し、揆眼山にやっと着いたウチら。

揆眼山のふもとに到着したバスから降り、何人かが背を伸ばす。

「ふわ〜やあっとついた〜つかれた」

「清継くん〜別荘は？温泉は？」

「そんなのは夜だ！！さあいくよ！！」

「うはあ〜温泉楽しみ〜」

一時間後

「なんだよ〜ず〜と山じゃんか！！」

「あたり前だ！！修業だぞ！！」

「足いたいー」

ウチらが山に入って一時間、まだまだ山は続く。

皆もう限界のようで、ワカメにキレている子達が何人かある…

てか、マジでこれどこまで続くの!?

ウチは修行（陰陽師&言霊術師）のおかげであまりつらくはないんだけど、他の子たちかなあ…?

大丈夫かなあ…：そういえば、原作ではウチが？梅若丸のほこら？を見つけるんやっただけ…？見つかるかなあ…

『なんやろ…あれ…』

よし、発見!!

「え？」

ウチの視線の先には、小さなほこらがあった。

多分これが？梅若丸のほこら？やったと思う…

『何か書いてある』

「うゝん読めないぞ？」

『ちよつと見てきます』

「アクティブな陰陽師だ」

「？梅若丸？つて書いてあるよ！！」

リクオくんでもうメガネいらんとちゃう？あんな遠いもん見れるなんて…

さすがは次期妖怪の主！！（関係ねえ…！！）

『あつ ホンマや』

「梅若丸のほこら…きつとここだ！！やったぞゆらくん！！さすがだな！！」

ワカメはそう言い、ウチの肩を叩いた。

てか、ワカメの分際でウチのこと触んじゃねえ…虫唾が走るわ…

『はあ…』

「意外と早く見つけたな…さすが清十字怪奇探偵団!!」

誰かがいきなり声を掛けてきた。

この人は確か…

「ああ!!あなたは!!作家にして妖怪研究家の…化原先生!!」



## ウチと牛鬼編突入（後書き）

ちよつと短くて、すみません…  
多分今度こそ長くなります…

## ウチと梅若丸のほくら（前書き）

更新遅れてすみません…

最近忙しくて…ソレも言い訳にしか聞こえないでしょうけど…

本当にすみません

これからハチマチマ更新頑張っていきたいと思います

ウチと梅若丸のほこら

「ああ！！あなたは！！作家にして妖怪研究家の…化原先生！！」

そう、原作で？化原？と名乗る妖怪研究家であり、実際は馬頭丸に操られるんだっただけ…？  
ある意味可哀想なキャラクターなんだけどな…自分の中で…

「お会い出来て光栄です！！」

「うんうん」

「「「……………」」」

感激するワカメと化原を冷たい、変な物を見る目で皆は黙視する

ウチも変態を見るような目で化原を見てみると、奴は梅若丸について話し始めた…

てか、これって実際には馬頭丸がしゃべんってんだよね…牛鬼様大好きなのかな…？

「梅若丸…千年程前にこの山に迷い込んだやんごとなき家の少年の名…

生き別れた母を探しに東へと旅をする途中　この山に住まう妖怪におそわれた」

「ほう…妖怪に………」

それが、当時の牛鬼なんだよね…？

牛みたいなクモみたいな…キモい奴…

「この地にあつた一本杉の前で命を落とす　だが、母を救えぬ無念の心が」

この山の靈障にあてられたか 哀しい存在へと姿を変えた

梅若丸は？鬼？となり この山に迷い込む者どもをおそうようにな  
った

「その梅若丸の暴走をくいとめるために この山にはいくつもの供  
養碑がある

そのうちの一つがこの？梅若丸のほこら？だ」

牛鬼も、すごい過去を背負っているんだよね…

自分的には牛鬼好きだから、何かしてあげたいよね…

『…………梅若丸…（もう、牛鬼はそう呼ばれないのかなあ…………）』

「意外にありがちな昔話じゃんか」

「妖怪先生が妖怪修業なんてゆーからさー」

そう言い、鳥居達は男の話を信じようとし  
ない  
まあ、普通の人ならそういう態度だよ

「あれ？信じてない？んじゃーもう少し見て廻ろっか……」  
そういう化原に皆はついていった

「すっごい霧深いなあ……全然晴れてたのに……」

そついい、ワカメは周りを見回した

相当息があがってんなあ……

「ん？何だこれ……」

巻はそういうと、隣にあったものを触ろうとした

「それは爪だよ」

「爪！？」

化原の発言で、皆は改めて自分たちの周りの木に刺さっている木を見た

コケが生えてるってことは、相当時間たってるんだなあ…

今の牛鬼さんもこんな爪あるよねえ…

「ここは妖怪の住まう山だ もげた爪くらいでおどろいちゃーこまる」

怖がる鳥居たちをよそに、化原は話を続ける…

「山にまよいこんだ…」

……旅人をおそう妖怪…名を？牛鬼？という」

この話を聞いたとたん、巻と鳥居が帰ろうと騒ぎ出す…

リクオくんもそれに賛成する

まあ…ウチもそれには賛成やな このままここにいても面倒だし…

でも原作どうりに進ませるにはこのイベントは必要なんだよねえ…  
ハア…

リクオくんの言葉を聴いた二人はリクオくんを連れて山を降りよう  
とするけど、ワカメがそれをとめ、さらに続ける

「暗くなつた山をおりる方が危険だ！！それにおりてもバスはもう  
ない」

「「ええ

」」

巻と鳥居が嫌な顔をする。てか、その反応普通…

普通の人はこんな所に一晩いたいとは思わないよ…梅若とか妖怪さ  
んたちはOK！

「ふふ！！何をビビっているんだ君たち！？ボクの別荘があるじゃ  
ないか！！

この山の妖怪研究の最前線！！セキュリティも当然バツグンだ！！」

彼が示す先には、一つの建物 別荘があつた。



てか、よくこんな所に別荘建てたなあ…馬鹿か…？馬鹿だな

「セキュリティ？妖怪に？きくかな…？」

リクオくんもつともないうねえ…

実際にこんなセキュリティが効く妖怪、いたら見てみたいよ

「使用人が時々来てるが何か出たなんて話1回もないぞ！？君たちは心配しすぎだ！！」

妖怪運の悪さで一回も妖怪を見たことがないお前に、そんなこと言われても全然信用ならん！！

「ハッハッハッ…まあ…いうても牛鬼なんて伝説じゃから、あのツメも誰かの作り物かもしれんしの」

お前がさっきこれ本物です〜ヤバイよ〜的な発言したんだろ！！

「いや…それは…」

ほらリクオくんも言葉つまってんじゃねえか…！！

化原もああ言い、ワカメも引かないし、しかも巻たちを食事や温泉

で釣り始めた…

「それにほら！！おそわれたとしてもこっちには少女陰陽師 花開院 ゆらくんがいるわけだ！！ ねえ！？ ゆらくん大丈夫だよねえ！？」

聞いてくる位なら、ここにいなければ良いのに… タクシーとか呼べるだろ…

『…』

一応念のために式神は何体か持っておくか…

四神も呼べるけど、そうしたら馬頭丸が可哀想だし…

てか、ウチ、言霊術師でもあるっていったよね…！！皆そこスルーなの！？

てか、この牛鬼編入ってから、ウチあんまししゃべってなくね…！？ 心の中では超いっぱいしゃべりまくってるけど…

あの後ワカメが化原も一緒に別荘にどうかと誘ったが、化原はウチらに忠告を残して帰っていった…

確かこの後、馬頭丸が化原からあの変な糸をとるんだよなあ…

糸がとれたら、今まで自分が何をやっていたか覚えていない…的な？

ある意味最強じゃん…！！

ウチと梅若丸のほこら（後書き）

次回は多分戦闘シーン…

上手に書けるよう、祈っていてください…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0821x/>

---

偉大なる陰陽師の言霊術師

2012年1月8日23時46分発行